

[実践報告]

HBG 重度・重複障害児スポ・レク活動教室 「はなまるキッズ」の2017年度活動報告

加地 信幸¹・河野 喬¹・山西 正記¹・房野 真也¹・森木 吾郎¹・山崎 昌廣¹

本報告は、広島文化学園大学の私立大学研究ブランディング事業〈スポーツ・健康福祉研究部門〉として実践研究に取り組んでいる、HBG重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」の活動について、2017年度の活動を中心に報告をしようとするものである。

1 活動の経緯

筆者が活動を始めたきっかけは、身体、及び知的にも最重度の障害を有する子供の「運動・スポーツの指導法や取り組みの実績が少ない」「サポートできる指導者が少ない」「通える場が学校や病院以外に無い」などから、運動・スポーツ、健康増進、余暇活動の充実の必要性を感じたからである。そこで、健常児が塾や習い事に通う場が多様にあるように、最重度の障害を有する子供が家庭や学校以外で「楽しめる場所づくりをしたい」「参加できるスポーツ教室を定着させたい」という思いから、2007年より重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」（以下、HBGはなまるキッズ）の活動を開始した。これまで、最重度の障害を有する子供が主体的に活動できる場の提供と、指導者育成に取り組み、活動を始めて11年が経過した。

最重度の障害を有する子供は、これまで病院での入院生活を余儀なくされてきたが、近年は医療技術の進歩により在宅での生活が可能となり、自宅から学校や施設などに通うことができるように

なった。しかし、現在においても学校・施設・病院以外に通える場はほとんど見当たらない。日常的にベッドでの寝たきり状態や車いすなどで生活をしている最重度の障害を有する子供（以下、子供）は、車いすやベッドなどから離れて運動・スポーツを行う場はなく、そのような発想により実現できる運動・スポーツ種目も見当たらないのが現状である。

そこで筆者は、子供が「車いすなどから降りて、あぐら座位などのいろいろな姿勢を保持するだけでも運動・スポーツを行っている」という新たな考えをもとに、子供が参加可能なように用具、ルール、指導法等を工夫した運動・スポーツ種目、つまり「アダプテッド・スポーツ」を自ら開発・実践し活動を継続してきた。

また、HBGはなまるキッズでは、専門性の高いボランティア支援者の育成にも力を入れて取り組んできた。活動を通じて、子供の身体に直接触れて支援ができる技術を身に付けると共に、医療面・安全面への配慮ができるボランティア支援者の育成を図るため、定期的に毎月1回（主に第四土曜日）の運動・スポーツ教室を開催したり、勉強会を行ったりして技術の向上に努めてきた。

なお、HBGはなまるキッズは、第48回博報賞特別支援教育部門を受賞した。2017年11月10日、東京の日本工業倶楽部にて贈呈式が行われ、代表者である筆者が賞状と副賞を受け取った（写真-1）。

¹ 広島文化学園大学 人間健康学部 スポーツ健康福祉学科
(Department of Sports, Health and Well-being, Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)



写真-1 第48回「博報賞」贈呈式

2 活動内容の特徴

現在、地域やスポーツセンターなどで行われている運動・スポーツ教室を見ても、HBGはなまるキッズに参加しているような子供を対象とした運動・スポーツ教室はあまり見当たらず、そもそも「スポーツなんて無理なのでは」と思われがちである。

HBGはなまるキッズが開催する教室では、子供にとって身体を起こしてあぐら座位をキープすることだけでも運動・スポーツを行っていると考え、「車椅子などから解放してダイナミックに運動する」「同じ姿勢を続けない」「寝たきりにしない」「主体的な活動の場を提供する」といったことを大切にしながら運動・スポーツを実施している。また、子供達が日常生活の状態となっているベッドや車いす等から離れて、身体を起こした姿勢を保持しながら運動・スポーツを行うことができることから、通常通う学校や施設・病院とは趣が違う、地域で運動・スポーツができる数少ない貴重な場となっている点が大きな特徴である。

HBGはなまるキッズでは、子供がベッドや車いす等から離れてできる「アダプテッド・スポーツ」として、①スクーターボード運動(写真-2)、②トランポリン運動、③マットローラー運動、④スローベンチ椅子ラジオ体操(写真-3)、⑤マット・コロコロ運動、⑥シッティングふわふわ風船バレーボール、⑦プール運動、⑧竹太鼓運動、⑨



写真-2 スクーターボード運動



写真-3 スローベンチ椅子ラジオ体操

風船リレー運動など、9種目の指導方法、用具などを独自に開発し、これまで取り組んできたことも大きな特徴である。

3 参加している子供とボランティア支援者の登録者数

11年間の活動を経て、参加している子供の登録者数は、活動を始めた当初の7倍の約40人に増加した。子供の年齢は5歳～16歳で、主な居住地は、広島市、廿日市市、福山市、安芸郡坂町などとなっている。主な身体障害は、脳性麻痺による体幹機能障害（1級）、知的障害は療育手帳[㊤]（最重度）がほとんどで、身体及び知的にも最重度の障害を有している。

また、HBGはなまるキッズには、多職種の者がボランティアとして登録し、教室を支えている。現在、ボランティアとして関わる支援者は、特別支援学校教諭を中心に、医療職（理学療法士、作業療法士、看護師など）、福祉職（保育士、障害者施設指導員、高齢者施設相談員など）をはじめ、一般企業、自営業など多職種の登録者数が、活動を開始した当初の12倍の約60人に増加した。

4 広島文化学園大学広島坂キャンパスでの実施

2017年度HBGはなまるキッズの開催日時、場所、及び参加者数は表-1に示す通りである。第1回目は、4月に従来通り広島市心身障害者福祉センターで実施した。第2回目以降、5月からは活動場所を本学広島坂キャンパス4F・健康福祉ホールに移して実施した。7月、8月は広島市心身障害者福祉センターで「プール運動」を実施した。合計15回を実施し、年間延べ人数は子供が133人、一般のボランティア支援者が180人、学生支援者が88人、年間延べ人数の合計は401人であった。一回の教室には、子供、一般のボランティア支援者、学生が平均で25.1人の参加があった。なお、参加者数に含んでいない子供の保護者や兄弟等が、送迎や付き添いとして多数参加した。

このように、HBGはなまるキッズは、子供が楽しめるアダプテッド・スポーツ実践を継続してきた。また、子供を直接支援できる対人援助の専門家の育成に努めながら、毎月定期的に地域貢献

表-1 2017年度HBGはなまるキッズの開催日時、場所、及び参加者数

日にち	場所	参加者（人）			
		子供 出席	ボランティア 支援者		延べ人数
			一般	学生	
平成29年4月22日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	10	17	1	28
平成29年5月27日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	6	13	15	34
平成29年6月24日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	9	19	7	35
平成29年7月29日（土）	広島市心身障害者福祉センター・プール	8	12	4	24
平成29年8月9日（水）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	9	5	5	19
平成29年8月16日（水）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	6	9	5	20
平成29年8月22日（火）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	5	3	3	11
平成29年8月26日（土）	広島市心身障害者福祉センター・プール	7	11	1	19
平成29年8月30日（水）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	0	2	6	8
平成29年9月16日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	7	7	1	15
平成29年10月21日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	11	14	5	30
平成29年11月25日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	8	15	7	30
平成29年12月23日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	10	15	7	32
平成30年1月27日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	12	8	9	29
平成30年3月3日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	9	18	3	30
平成30年3月24日（土）	広島坂キャンパス・健康福祉ホール（4F）	16	12	9	37
年間延べ人数		133	180	88	401
平均		8.3	11.3	5.5	25.1

（平成30年3月30日現在）

してきた。

なお、本学広島坂キャンパスで実施を開始したことを契機に、2017年度より従来の名称の先頭に「HBG (Hiroshima Bunka Gakuen)」を付け、HBG 重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」とした。

5 アダプテッド・スポーツ実施の成果報告

2017年度の新たな取り組みとして、毎月一回実施している活動に加え、夏休みの平日に活動でき

表-2 日本体育学会第68回大会in静岡大会プログラム予稿集掲載

<p>発表題目：「重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ実施が姿勢保持力及び生理・心理的効果に及ぼす影響について」</p>
<p>○加地信幸，河野喬，山西正記，房野真也，森木吾郎，山崎昌廣（広島文化学園大学人間健康学部開設準備室）</p>
<p>広島文化学園大学では、「HBG重度・重複障害児スポ・レク活動教室『はなまるキッズ』」を毎月開催しており、障害児が主体的に活動できる場の提供と指導者育成に取り組んでいる。重度・重複障害児の保護者からは、「姿勢が良くなり体力がついた」「活動時に嬉しそうな表情を見ることができた」等の好評を得ている。本研究は、重度・重複障害児が車椅子等から離れて、あぐら座位等の様々な姿勢で指導者から必要に応じて支援を受けながらアダプテッド・スポーツを実施することによる、姿勢保持力、及び生理・心理的効果について明らかにすることを目的とした。本研究の対象者は、スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」の参加者であり、広島市とその近郊に在住の5～15歳の重度・重複障害児であった。参加した重度・重複障害児の殆どが、脳性麻痺による体幹機能障害1級、療育手帳（最重度）等と、身体及び知的にも最重度の障害があった。測定項目は、ビデオカメラによる活動記録、及び活動前後の唾液アミラーゼであった。ビデオ記録分析によると、活動時に重度・重複障害児が体幹伸展位を保持しながら、笑顔を見せる場面が確認され、生理的・心理的効果が認められた。</p>

る場を8月9日、8月16日、8月22日に実施し、計12名の参加があった。

夏休みの活動時には、日頃なかなか丁寧に行うことのできないアダプテッド・スポーツ実施前後の健康チェック（血圧、脈拍、唾液アミラーゼの測定等）と、ビデオカメラによる活動記録の行動分析を実施した。HBGはなまるキッズのアダプテッド・スポーツ実施が、子供達にとってどのような効果があるのかを知り、今後も元気に安心して運動ができるようになることを目的として、保護者やボランティア支援者と協力しながら実施した。

アダプテッド・スポーツ実施の成果については、日本体育学会第68回大会in静岡大会のアダプテッド・スポーツ科学専門分科会（2017年9月9日）において口頭発表を行った。表-2に示す通り、日本体育学会第68回大会in静岡大会プログラム予稿集に掲載された。

6 アダプテッド・スポーツ支援を経験した学生の声

2017度より新たなボランティア支援者として、本学広島坂キャンパスで福祉やスポーツを学ぶ現役の大学生達が、教室の見学や支援に訪れるようになった。学生達は、子供達に対する体験的なアダプテッド・スポーツ支援を通じて、対人援助技術の向上に取り組んでいる。

表-3に示す通り、参加した学生からは、「誰でもスポーツは楽しめるということを実感した」「障害の種類や状態に合わせて行うスポーツの大切さを肌で感じた」「障害児とのコミュニケーションの難しさが分かった」「介護職の大変さと楽しさが分かった」「ボランティア支援者の方々から障害に応じた指導について見て学ぶことができた」「支援することの素晴らしさを感じた」等、体験的な学びを深めることができた内容の感想が寄せられた。

表-3 学生からの感想（一部要約・抜粋）

重度の障害が有っても無くてもルールを工夫することで、誰でもスポーツは楽しめるということを実感した。
子供たちと接したり、活動の様子を見たりして、障害の種類や状態に合わせて行うスポーツの大切さを肌で感じ、体験することができた。
障害があっても体を動かすことを楽しんでいる様子が、行動や表情から読み取れることが分かった。
子供達と音楽に合わせてお互いの手でハイタッチした際に笑顔を見せてくれたのが嬉しかった。
はじめは不安だったが、観察したり触れ合ったりすることで慣れてくると、一緒にスポーツが楽しめているという実感がもてた。
自分たちがやっている野球やサッカーとは違い、スクーターボードに乗って走ったり、トランポリンで揺れたりする活動もスポーツであることが分かった。
重度障害児が活動を通じて身体刺激、視覚刺激などを感じることによって、「楽しい」「嬉しい」「驚く」「怖い」等の感情を引き出すことができることが分かった。
体力的には自信があったが、介助をしながら子供達と活動してみて翌日は少し筋肉痛になった。介護職の大変さと楽しさの両方を少し分かった気がする。
障害があっても遊ぶことが好きだったり、人と触れ合うことが好きだったりするということを改めて考えさせられた。
障害のある方へのスポーツを指導すること以前に、実際に関わることの難しさを感じた。
どうやってコミュニケーションを取ったらいいのか分からず、表情をみながらどう支援したら楽しんでもらえるのかについて考えないといけなかったのだととても大変だった。
鼻から胃にチューブを通して子供や、いきなり体が反り返る痙攣がある子供等のスポーツを体験し、安全面や大切に考えなければいけないことを学ぶ機会となった。
ボランティア支援者の方々が、個々の障害に応じた体の触れ方や言葉かけ等、一瞬の判断と対応能力、接し方を見て学ぶことがたくさんあり、支援することの素晴らしさを感じた。
ボランティア支援者の方々の子供達の笑顔を引き出す力がすごいと思った。
ボランティア支援者の方々が、障害のある子供達の表情の少しの変化や、体の力の入り具合等を観察することによって、どう思っているのかを判断されていると感じた。
ボランティア支援者の方々は、自分たち学生が難しいと思うことを、簡単そうに、笑顔で、楽しそうに支援されている姿を見て尊敬の念を抱いた。すごいと思った。
活動がもっと全国に広がり、どこの町に住んでいる最重度の障害のある子供達でも、スポーツ活動に参加する機会があったら良いと思った。

7 参加した子供の保護者の声

HBGはなまるキッズの活動に参加した子供の保護者に対し、実際に参加してどのような感想をもったか、子供の様子はどうだったか、子供に何か変化が見られたか等について聞き取りを行った。表-4に示す通り、「表情が嬉しそう、豊かになった」「やりたい気持ちを表現している」「子供が楽しめる数少ない場となっている」「姿勢が良くなり体力がついた、元気になった」「目覚めている時間が増えた」「人や物などに対して興味をもつようになった」「介助負担が減った」等の感想が寄せられ、我が子が楽しくダイナミックに活動できた様子を喜ばれていた。活動に参加した当日の帰宅後の様子について聞いてみると、「夕

表-4 保護者からの感想（一部要約・抜粋）

子供の表情が嬉しそう。
表情が豊かになった。
やりたい気持ちを発声や身体の動きで表現している。
子供が楽しめる数少ない場で嬉しい。
姿勢が良くなり体力がついた。
風邪をひいても短期間で治るようになった。
目覚めている時間が増えた。
人や物などに対する興味が増してきた。
介助負担が減った。
夕食がいつもよりも進み、よく食べた。
心地よい疲れもあったのか、いつもより早く入眠し、よく眠っていた。
しっかりと体を動かすことが大事であると改めて感じた。

食をよく食べた」「いつもより早く入眠し、よく眠っていた」等、活動を通じてしっかりと体を動かすことができたことで、食事や睡眠にも効果が見られたとの感想が寄せられた。また、体を動かすことが大事であることを改めて感じたとの感想が寄せられた。

おわりに

前述のように、HBGはなまるキッズは11年間の活動を経て、参加する子供の登録者数は設立当初の7倍の約40人に増加し、ボランティア支援者の登録者数は設立当初の12倍の約60人に増加した。地元の新聞（中国新聞・広島都市圏の紙面）やテレビ（TSSテレビ「満点ママ!!プラス」、RCCテレビ「ランキンLand!」）でもHBGはなまるキッズが紹介され、参加を希望する子供の保護者や、ボランティア支援者を希望する問い合わせなども増加傾向にある。また、2017年度より本学広島坂キャンパスに活動する場所を移し、現役大学生が新たにボランティア支援者として多く参加するようになった。

今後もHBGはなまるキッズでは、どんなに障害が重くても子供達が地域で楽しく運動に取り組むことができる定期的な外出機会の保障に努めると共に、HBGはなまるキッズの運動実施の効果、活動の意義や有効性等についても明らかにしてい

きたい。そして、最重度の障害を有する子供達に通うことができる数少ない地域で開催される運動・スポーツ教室として、保護者、ボランティア支援者、及び関係者の方々の理解と協力を得ながら、より一層の活動内容と指導法の充実、及びボランティア支援者の育成に努めていきたい。

注

文中に掲載している子供や支援者等の写真については、本人または保護者に使用の承諾を得ている。

参考文献

- 加地信幸(2016)『特別支援教育時代の体育・スポーツ』大修館書店 pp.184-188
- 加地信幸(2016)『新版 障がい者スポーツ指導教本 初級・中級』ぎょうせい pp.228-233
- 加地信幸(2012) :「ちょっといい話・私の工夫 身体機能向上や体力づくりをねらった支援」『肢体不自由教育第207号』日本肢体不自由教育研究会 pp.184-188
- 加地信幸(2007)『みんなが輝く体育⑦障害児体育の授業』創文企画出版 p.14, pp.24-30, pp.56-67, pp.88-93, pp.102-10